

私のやんごとなき王子様

夕食後、まだ作業が残っていた私は作業部屋へ戻っていた。

部屋の電気は付いていたけど、生徒は誰もいない。

ちょっと寂しいけどま、いっか。

私は静かで集中出来るといい方向に考えてミシンを動かし始めた。

どれ位時間が経った頃か、足元に置いていた新しい生地を取る為にしゃがんだ時だった。

ガチャリと部屋のドアが開く音がして、話し声と足音が中へと移動して来た。

次にボタンとドアが閉まり、再び静かになった部屋の中で男女2人がいるということが分かった。

ど、どうしよう。出るに出られないけど……

そっと机の下から顔を覗かせると、なんとそこには利根君と水原さんがいた。しかもとても緊迫した雰囲気だ。

ゴクリと唾を呑み込み、そっと机の下に身を隠す。

全部聞こえてしまうんじゃないかってくらい、心臓がドキドキと鳴っている。

「それで、大事な話して、何？」

利根君だ。

しばしの沈黙の後、水原さんの緊張した声が響いた。

「あの、私……利根君の事が好き、なの」

えっ？

思わず声が出そうになり、私は自分の口を慌てて塞いだ。

「いつも穏やかで優しくて、利根君と話しているととても落ち着くの……ずっと好きだった」

「水原さん……」

やっぱり水原さんは利根君の事が好きなんだ。

利根君は彼女が言うように穏やかで優しく、そして必要な時に助けてくれる。

風名君と幼なじみで、時には冗談を言ったり義憤にかられて腹を立てたりする、とても素敵な男子……。

私も、そんな利根君の事が好きだ。

きっと、去年委員で一緒だった時から好きだった。

どうしよう。水原さんは利根君と一緒にいてもとてもお似合いで、私とは全然違う素敵な女の子だ。きっとすごくモテるだろうし、利根君が水原さんの事を好きだったら2人は付き合っちゃうんじゃないだろうか。

「今すぐ返事が欲しいとは言わないわ。でも、どうしても自分の気持ちを伝えなかったの……だから、私と付き合ってもいいか、本気で考えて欲しいの」

微かに震える声でそう言う水原さんに、利根君は何も言わない。

今どんな状況なのか声だけで判断するしかない私は、今にも倒れそうな程クラクラとめまいがし出した。

水原さんがどれほど勇気を振り絞って告白しているのか、その気持ちが分かるから。

「ごめんなさいね、呼び出して勝手な事言って……それじゃあ、また明日。おやすみなさい」

その言葉を最後に、水原さんは部屋を出て行った。

ドアが閉まる音がしてしばらく、ずっと微動だにしなかった利根君がボソリと何か呟いて、ゆっくりと部屋を出て行った。

私はそっと机の下から這い出て来ると、椅子に倒れ込むように体を預けて大きく深呼吸をした。

ずっと息を潜めていたおかげで、軽い酸欠になっていたのだ。

「はああーーーー」

握っていた生地に視線を落とし、もう作業を続ける気力が失せている事に気付く。

利根君は一体何と返事をするのだろう。

自分は告白する勇気もないくせに、利根君と水原さんが上手く行ったら嫌だと本気で思っている。なんて自分勝手なんだろう。

「はあっ……」

もう一度ため息を吐いて適当に机を片付けると、私は急いで部屋を出た。電気を消して鍵をかける。

先生の所に鍵を返しに行かなくちゃいけないけど、面倒だな……早く部屋に戻りたい。なーんて、そう言う訳にもいかないもんね。

そして私は廊下を全速力で走った。

やるせない思いをかき消す為に。

[利根 9 日目・No.1](#)へ

一つ戻る[利根 8 日目・No.1](#)

ブラウザを閉じてお戻りください
[私のやんごとなき王子様トップへ戻る](#)